
力なき破壊

霧峰ヒロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

力なき破壊

【Nコード】

N3825A

【作者名】

霧峰ヒロキ

【あらすじ】

新人類「アトミック」。彼等を利用する「TOUA」。TOUAを利用し、第三次世界大戦を終結させようと目論む少年「浩一」。そして世界を利用し神になろうとする「テラ」。様々な思惑と想いが交錯し、人々は哀しみの唄を奏でる。推理戦とアトミック戦が熱い、アクション推理ファンタジー！

第一章　忌避

西暦二一五一年、十一月六日

俺は少し荒廃した町並みを教室の窓から眺めながら、ため息をついた。

頬づえをつくのも疲れてきて、手すりにもたれ掛かって外を眺める。

窓の外を眺めながらいつも思う。

この世の中腐ってる。

穢れきった人間が再び起こした戦争。

殺し、奪い、そんなことを繰り返して一体何が残るというのだろうか。

戦争さえなければ、ここから見える景色は少し無からず綺麗だったはずだ。

空襲対策の為、日本を膜で包み込む様に張られている、半透明の防護膜。

これが外からの光の半数をさえぎってしまい、いつでも曇っている様な暗さにさせる。

俺が生まれるずっと前は、とても美しい世界だったらしい。天からは光がさしこみ、青天が広がり、そして地上には草花があった。だがそれは、戦争という名の絶望そのものに奪い去られてしまった。

天に広がるのは防爆壁。

地に広がるのは冷鉄。

平和を捨て、争いを無窮に求め続ける理由が何処にあるのだろう。そしてここ

戦争のさなか、将来役に立つとも思えない様な情報ばかり教えこ

まれる、全く必要性の無い学校。

こんな所、本当に無くなればいいのに。

少し耳を傾ければ聞こえてくる、本当に無為な会話。テレビの話しだとか、遊びの話しだとか、恋の話しだとか。

一体そんな話をして何が楽しいのだろうか。時々耳を抑えなくなる。

そして更に鬱陶しいことに、そいつ等はその話題で俺に喋りかけてくる、毎日毎日。俺は軽く相づちをうつただけで、もう喋りかけてくるな、という雰囲気を出してみるのだが、そいつ等は喋りかけてくる。

そしてまた、一人喋りかけてきた。

「浩一、窓の外なんて眺めてて楽しいか？」

俺は目を伏せ、少しため息をついてから、疲れた半眼で彼の顔を振り返り見る。

峰崎雄二だった。最近転校してきたばかりで、生徒の中でも俺に一番喋りかけてくる、一番鬱陶しい奴だ。

ガキっぽくていつも騒がしく、授業中ですら喋りまくっている。

本当に、同じ十四だとは思えない。背丈も低いし。

そんな彼は俺に微笑みかけてくる。俺は投げやり気味に答える。

「楽しくなんか無いさ。でも、何もしないよりましだろ」

それだけ言うと、俺は再び頬づえをついて窓の外を悠然と眺めた。だが彼は悩んでいる様な表情になると、腕を組んで首をかしげる。

「うーん……友達と喋った方が楽しくない？ 折角の休み時間なんだしさ、喋ろうよ」

喋ろうよ、か ばかばかしい。

俺はお前達が大嫌いだ。

そして俺は、こんな奴らと同じ場所に机を並べている、俺が大嫌いだ。

だが、そんなことを口にはできない。口にすれば、嫌われる。

大嫌いな奴には、どうでも思われたいのが一番いい。最初から存

在していないと思わせておけばいい。それなら利も害も発生しない。利が発生しないということは、害が発生しない事。害が発生しないということは、利が発生しない事。

だから俺は愛想笑いを浮かべる。

「好意は嬉しいけど、今日は少し疲れているんだ。休ませてくれない？」

こうやって嫌いな奴の為に愛想笑いを浮かべ、自分を偽りつつ、社会の様に穢れていつてしまうのだろうか。

ふとそう思い、嫌になる。

だが俺は出きるだけ表情を崩さぬ様、上目遣い気味に雄二を睨む。彼はつまらなそうな表情だ。

そんなに相手に反応を示してほしいのだろうか。だが、ご期待には添えないな。俺は好意をもたれる為に愛想をふっているわけではない。

もう俺に構うな。一人に……しておいてくれ。

だが、雄二は何故いつも俺に喋りかけてくるのだろうか。

たまにいる、冷たい態度をとられるのが好きな奴なのだろうか。

そうじゃなかったらこいつは本気で

そこで彼が悲しそうな声を上げる。

「そうかぁ。まあ暇だったらさ、いつでも話しかけてよ。俺、いつでも話し相手になるからさ」

それだけ言うと、雄二は男子の取り巻きの中へと帰っていった。流石にこれだけ期待を寄せられて裏切るといったのも心が痛むが。だが俺に雄二は必要無い。俺はこれからもずっと独り。それでいいんだ。

家族がいない俺には、それがお似合いだ。

そう、独りでいいんだ。独りなら、裏切られて傷つく心配も無い。とそこで、チャイムが鳴り始めた。途端、女子はうるさく騒ぎながら各々の席へと座っていく。男子も席に座り、それでも喋りつづける。

ああ、本当にうるさい奴らだな。

俺は一番後ろにある自分の席に座って、授業が始まるのを黙って待った。

やっと全ての授業が終わり、俺は鞆を背負ってさっさと教室から出た。

長い廊下を歩き、階段を駆け下り、あっという間に校門前まで着いた。俺は一瞬だけ後ろを振り返り、すぐ視線を前に戻す。

やはりいつもと同じ。誰もいない、声もしない。ただ虚空の風が悲しい、不規則な音色を奏でるだけ。

孤独とは静寂。独りだから前には誰もいないし、声もしない。

そう、それでいいんだ。

俺に居場所など無い。

友達も要らない。

この道の様に、静寂を歩んでいくのだ。

何も要らない。

悲しくなんて、寂しくなんて、無い。

俺はやっぱり。人間が大嫌いだ。

体が前へとひとりでに動き出した。抵抗も無く、俺の体は進む。

だが途中で突然体が止まった。誰かに後ろから、手を握られている。

はっと意識を取り戻して俺が後ろを振り向くと、そこには雄二がいた。

彼は俺の手を握っている。俺が止まったのを確認すると、彼はその手を離した。

それから俺にまた、あの笑顔を向けてきて言った。

「一緒に帰ろ？」

だんだんと意識が元に戻ってきた。

しかし、現状はあまりよくなかった。雄二が俺を引きとめて、一緒に帰ろうと言ってきている。

彼の顔を再び見ると、期待に輝く双眸が俺を覗きこんでいる。それに一瞬挫けそうになる。いいよ、と答えそうになる。

だが、すぐに顔を引き締める。ここで一緒に帰っては駄目だ。ここで帰っては、これから誘ってくる確率が発生してくる。

俺は独りなんだ。他人と帰るなど、俺が許せない。しかし彼は期待した顔。

ここで断つても、別に嫌われたりはしないはずだ。

俺は一度咳き込んでから、小さめの声で答える。

「あ、あのさ、俺今風邪気味だし、雄二にも風邪を移しちゃいそうだから、今日は一人で」

俺が言い終わらないうちに、突然彼は俺の肩をつかんできて、目を大きく開く。

「そ、それじゃあ尚更だろ！一人で帰ったら余計風邪が悪くなっちゃうよ！俺が側にいるから、ゆっくり帰ろう。な？」

俺を覗き続ける。心配、している様な目だ。

何故だ、何故雄二は俺にこんなにも構ってくるんだ。

いや、今回は俺のミスか。お節介な雄二の性格も考えず演技する必要は無かった。

と言うことは、今から断つて一人で帰るのは不可能。断つてもどうせこいつは、風邪になっていると思うている俺に、付きまとうてくる。

仕方が無い。

「それじゃあ、頼むよ」

「了解！」

彼はにつこりと笑って、何故か敬礼する。

こ、これには反応した方がいいのだろうか……いや、バカは無視だ。

俺達は、二人並んで帰路を歩みだした。

「浩一家族がいないって噂、本当だったんだな」

雄二はあっけらかんと言いつつ放つ。

普通、こういうことをあつさり言うものだろうか。もう少し、相手に気を遣う、ということを学んだ方がいいよな、こいつは。

「うん。八歳以前の記憶も無いんだし、当たり前かな」

「そっかあ。あれ？ でもなんで浩一は、自分の名前と年齢を覚えてるわけ？」

「都合がいいことに、それだけ覚えてたのさ」

俺が愛想笑いを浮かべると、彼も笑みを浮かべる。

こいつは俺と違って愛想笑いなんてしてない。本当に、眩しい笑顔。

そこで、俺は愛想笑いを保ったままで続ける。

「でもさ、苗字だけは見事に忘れてたんだよね。浩一っていうのだけは覚えてたけど」

その言葉に彼は驚愕した様子で、おどおど聞いてくる。

「じゃ、じゃあ倉田っていう名前は偽名？」

「そう。これ知ってるの、まだ雄二だけだな。誰にも言つなよ？」

「……了解！」

また敬礼だ。

本当にこいつにこんなことを教えてよかったのだろうか。

確かに、こいつの性格から見てこういう他人の重要な秘密を漏らす様なことは無いと思うが、あまりにもガキ過ぎて逆に心配になつてきた。

それなら俺もこいつの秘密を知ればいい。思いきって質問をしてみよう。

「じゃあ、雄二は皆に隠してるのとかがあるの？」

俺が冗談を言う調子で訊くと、彼の反応は予想以上に大きかった。

汗をかいて、うつむいて体を震わせている。

そんなにも知られたくない秘密でもあるのだろうか。

「おいおい、俺に言わせといてお前だけ言わないって言うのは無しでしょ」

チャンス。彼がもし本当に、誰にも知られたくない様な秘密を握っているのだとしたら、この場でどうこういつて聞き出せるかもしれない。

「どうした？」

彼は顔を上げた。許しを請う様な表情だった。

「……これは流石に言えない」

「なんだよ、言えよ。俺だって記憶が無いとまで言っただ。誰にも知られたくなかった過去だ。お前だって言えよ」

「じゃあ……俺が握っている情報は国家機密情報なんだ！。だから言えない」

国家機密情報だと？ 雄二の顔を見る限り、冗談を言っているようにも、演技しているようにも見える。いや、喋り方が変わったような気も……ていうか、「じゃあ」で会話を始めた時点で思いつきり仮定のような……

国家機密情報となると、戦争に絡んでくる様な情報のはずだが、ということとは、嘘に決まっている。国家機密情報を握っていて、自分はその情報を知っています、なんて自白するわけが無い。バカはこないいい訳しか出来ないのだろうか。

と、彼の表情はいつもの微笑をたたえたものに戻る。

「それよりもさ、明日暇だからどうか一緒に遊びに行かない？」
「えっ？」

彼の突然の誘いに、俺は戸惑った。さっきまで考えていたこともどこへ、今はこの誘いの事が頭を埋め尽くす。

一緒に遊びに行こう。

いままで一回も言われたことが無かった。だから、こういうことを言われるのがどういいう感覚なのか、俺は今まで知らなかった。

彼が向けてくる笑顔。呆然とする俺。

変な気分……

いや、こんな事を考えてはいけないんだ。

決めたじゃないか。

“もう二度と人間を信じない”、と。

人を信じちゃいけない。変わらないものなんて無い。

いつかは必ず、別れがやってくる。

それならどうすればいいか？

そう、孤独。

独りでいれば裏切られることなんて絶対無い。

他者の干渉を遮り、たった独りでいることこそ、頭のいい生き方だ。

それなら自分で得た利益は全て自分のものになるし、傷つくことも無い。

俺はうつむいていた顔を上げ、冷徹を装った瞳で睨みつける。

「残念だけど、行けないな」

それに彼は顔をしかませて、怒った様な口調で言う。

「もう、浩一って本当につれない奴だな。そんなんだから友達居ないんじゃない？」

この言葉に、俺の中で何かが切れた。いままで我慢してきた感情、それが一気に溢れ出してきた。

気付くと、いつのまにか俺は彼の胸ぐらをつかんでいた。彼は苦しそうに俺の手を叩きながら、あえぐ。

だが、口は勝手に動き始める。

「お前に何がわかる。俺は独りでいたいだけだ。お前みたいならさい奴が一番、一番大嫌いだ。いや、俺は全てが大嫌いだ。嫌うなら嫌えばいい。だがそれ以上に俺はお前等が大嫌いだ。二度と俺に構うな。近寄るな。話しかけるな。バカな頭でも理解できたな」

俺はそれだけいうと、雄二の胸ぐらから手を離れた。

彼は地面に手をつけて苦しそうに咳をしながら俺を忌々しげに見

上げる。

「孤独を気取って、そんなにかっこいいか？」

言いながら、無表情の俺を睨みつけたままふらふらと立ちあがる。「浩一、お前は怖いんだ。前からずっと思ってた。お前は友達に裏切られるのが怖いんだ。それを認めたくないからずっと独りでいて、自分の中で、これでいいんだ、と勝手に自己解釈してかっこつける。そうしろ！」

次の瞬間には、俺の腕が彼の右頬を捉えていた。

雄二の体がぐらとなつて、彼は口から血を流しながら地面に膝をついた。

だが直後、彼の足払いに襲われ俺は体の側面から地面に倒れた。倒れた俺の顔面に、雄二の足蹴がすかさず飛んでくる。避けきれず顔面に直撃した。

だが、カウンターの要領で俺は彼の腹部に蹴りをいれた。

双方から血が宙に舞った。

俺は急いで立ちあがり、彼から距離を置く。雄二も同じ事をした。雄二は目を細めて、俺の目を覗きこむ。

「凶星だろ。そうやって自分以外はバカだとか、優越感に浸ってんだろ。バカは浩一だ。お前は独りで一体何ができるんだ？ 何も出来ないくせに、独りを気取るな」

も、もう許せない。

一瞬でもこいつを信じた俺がバカだった。俺と遊びに行こうなんて考えは、どうせ俺以外の男子が皆、都合があつてそれで俺しか誘う相手がいなかった。そんなところだ。

こいつはバカのくせに、ここまで俺のプライドを踏みにじりやがって。

……ぶっ殺してやる……！

俺は鞆から三本のナイフを取り出す。

それを見て、彼は表情を固くして後ずさりした。いい気味だ。死ぬのが怖いだろう？ 生きたいだろう？

だが俺はお前が大嫌いなんだ。

「死ね」

ナイフを二本彼に向かって投げ、残りの一本で直接襲いかかる。ナイフが雄二に刺さる

そう思った直後のことだった。突然彼は後ろへ跳びながら握り拳を前方へと向ける。

そして拳をぱつと開くと、雄二の目の前に突如として鉄の壁が現れ、ナイフから身を防いだ。ナイフは金属音を立てて、地面に転がる。

一体どこにこんなものを隠していたのかは知らないが。

この鉄の壁をかわしさえすればあいつを刺せる。

俺は速度を緩めることなく、大きな鉄の壁を横切って、冷や汗を流す雄二に襲いかかる。

ナイフが雄二の心臓を貫通した。

と思ったが、感触が無かった。ナイフの方を見てみると刃の部分がちやぐちやに折り曲げられていて、殺傷能力を無くしていた。

呆然と立ち尽くす。そして冷静さを取り戻してきた

何故俺は雄二を殺そうとしたんだ。

これはあまりにも無謀なことだった。やってしまった今、後悔した。

手から力なく、変形したナイフがすり抜け、地面に落ちる。

「ごめん。どうかしてたんだ。頭がこんがらがって……わざとじゃない、無意識のうちになってたんだ。ほ、本当に……ごめんなさい……」

俺は人を殺そうとした。無意識だったとはいえ、同じ事だ。

……許してくれるはずが無い。

彼は学校の生徒、先生、親、皆にこのことをばらすに違いない。そうなれば、俺は警察に捕まる。戦争が無かった時代とは違う。未成年でも、罪は罪。捕まるのだ。

俺の人生は終わった

だが、俺の言葉に彼は慌てて返してきた。

「う、ううん。浩一を挑発した俺が悪かったんだよ。ごめん」

この言葉に、俺は驚愕するしかなかった。

本当にこいつはバカだ。

殺されそうになったのに、何を言っているんだ。

だが こいつがバカでよかった。

これなら俺は捕まらない。俺はうつむいてにやりと笑った。

捕まる心配が無くなった今、思考は別のことを考え始める。

さつき垣間見た力。突然現れた鉄の壁。

あんなもの、よく考えてみれば体のどこかに隠しておけるはずが無い。

鉄は固く、曲げることも出来ないし、服の中に隠していたのだとしてもあんなにも素早く、服が破けること無く取り出せるはずが無い。

ということは、雄二が創り出したということになる。魔法というやつか？

そして今まで雄二から得た情報と照らし合わせていくと一つの真実に行きつく。

“雄二は国家機密情報を本当に握っている” そう考えて間違い無いはずだ。

冗談で言ったのかと思っていたら、本当だった。あまりにバカ過ぎて、嘘だと思いたいくらいだ。

だが雄二のことだから、本当にありえるかもしれない。

あとはこいつの反応を見るだけ。

いや待てよ、今言う必要は無いんじゃないか？

もしかしたら情報を俺が握ったことを、雄二を通して国家が知っ

たら、全てを敵にまわすことになりかねない。

それにこいつの力は役に立つ。

決めたらすぐ実行だ。

「許してくれるのか、ありがとう。そこでお願いがあるんだけど」

俺は悲しそうな表情を取り繕うと、斜め下を見ながら物言いたげに口を小さく動かしてみる。

それを見て彼は首をかしげて、何、と聞いてきた。

俺は顔をぐつと引き締めて、彼の顔をまっすぐ見た。

「俺の友達になってくれないか」

俺の意外な言葉に少し戸惑う雄二。

だが彼はすぐに笑顔になると、頷いた。

「いいぜ、友達になろう」

それに俺は微笑み返した。

「ありがとう。じゃあ、帰ろうか」

「おうっ」

彼が笑っている。俺も笑っている。静かな夕日を背に。

ははははは、本当にこいつは愉快だ。

こんな簡単に引つかかるなんて。

雄二は気付いてもいないだろう。

俺が雄二の力を利用する為だけに、友達になろうといったことを。これによって俺は少しの間うるさい奴らの仲間になることになる。

偽りの笑みを浮かべつつけることになる。俺にとって最大の屈辱だ。だがこいつの力がもし、俺の予想したものだったのであれば。

この戦争の世の中を変える事が出来るかもしれない。

誰かがやらなくてはいいけないんだ。この争いだらけの世を変える事を。

その為には。

こいつを信じこませ、利用しつくす。

将棋の駒の様なものだ。

利用する時だけ最大限に利用し、必要無くなれば新しい駒で局を

進める。

俺なら出来る。世界を元あるべき姿に変えてやるんだ。

この腐った世の中を、光溢れる新世界へと

夕日に照らされながら煙突の上に座り込み、双眼鏡で二人並んで歩く少年を眺める少女がいた。

まだ十五か十六くらいの、幼さが混じった顔立ちに、群青の髪。

長身瘦躯のその体が身に纏っているのは、全体が真っ黒に塗り上げられ、赤い線で模様が刻まれたダークスーツ。

双眼鏡から顔を離すと、すぐ目につく碧眼。それで彼らを再び一瞥してから、にやりと笑う。

「アトミック、見いつけた」

第一章ゝ忌避ゝ（後書き）

初めまして、霧峰ヒロキと言います。読んでいただき、ありがとうございました。

この小説を読んで「主人公歪んでるー」と思った方、いらっしゃるかもしれませんが勘違いしてあげないでください^^；

実は浩一君、本質は天然ボケキャラです。三章四章くらいになったら少年らしい一面も見えてくるはずですよ。

ですので、浩一のこと、嫌いにならないでくださいね^^；
では、今回はこの辺りで。また会いましょう。

第二章　騙詐

目覚し時計の大きな音で目が覚めた。

上半身を起こして伸びをしながらあくびをする。

上に伸ばした腕をそのまま目覚ましへと振り下ろし、音を止めてふと時計に目をやる。時刻は六時三十分を指していた。

「まだちよつと早いかな」

二階建てでそこそ広いこの家だが、俺一人で住んでいるんだ。下におりていつでもしょうがない。

俺は再びベッドへと寝転がり、目を瞑った。

だが、一度目が覚めてしまった以上、なかなか寝つけなかった。そうしているうちに、昨日のことを思い出した。

垣間見た雄二の力。突如として鉄を現した、あの力。

もし俺の予想が正しければ、あの力は更なる秘密を隠している。

俺はこれからあいつと上手く付合っていき、そして取り入り、あの力を束ねている国家と繋がりを持つ。

もしかしたらあいつはもう気付いていると言うことも考えられる。俺を信用したからかなのかは知らないが、国家機密を握っていると言い、更にあの力を、国家機密情報を握っていると教えた俺に見せてしまった。

それだけで、普通はばれたと気付くだろう。

だが、ばれたと気付けば俺と親密になろうとしないはずだ。いや、その真理を逆手にとつて、俺を殺そうという魂胆か？

しかしあいつに限ってそこまで考えてるとは思えない。いや、やはり国家関係者だ。そこまで底が浅いはずも無いか？

ということはあいつと付合う時は慎重に。

って、こんなに考えても無駄か。情報が足りなさ過ぎる。

昨日、三宮に遊びに行こうと誘われ、もちろん俺は了承した。これで心おぎ無く雄二の情報が得られる。

そうすればこれからのプランもたてやすい。
ははははは、なかなか面白くなってきたぞ。

今日から大変になりそうだ。頭もだいぶ使う。もう一眠りしておこう。

俺は外出用の服に着替えながら、リビングの壁にかけてある時計を見た。

七時半、約束の時間までまだ三十分ある。これならゆっくりとしても大丈夫だろう。

服を着替え終え、リモコンへと手を伸ばしてテレビの電源を入れる。

その時、少し気になるニュースが流れていた。

＜それでは、次のニュースです。TOUA総官の御堂孝三氏が昨夜未明、以前から問題となっていた防爆壁の厚さを、十メートルから八メートルへと変更すると発表しました。これはTOUA総会議で二週間も議論した上で決定されたことです。一部世論からの反発は否めませんが、これで日本の町にも希望の光が戻る事でしょう。変更は来年二一五二年の一月、つまり二ヶ月後、夜間に執り行われる予定です＞

TOUAという名前で、少々引つかることがあった

TOUAといえば戦争開幕直後、日米協定を結ばれたとき結成された機関。日本、アメリカ、両国の軍事に対して絶対的な決定権を持つ、国家に勝るとも劣らない権力を持った機関、日米軍事決定有権機関だ。

東京に日本本部があり、俗に“テュワー”と呼ばれている。

アメリカが同盟を求めてきた理由は、日本の防衛力にあった。

ロシアが戦争を始めてすぐ、ロシアは核を保有している脅威として、北朝鮮を核爆弾で壊滅させた。

さらに、日本近畿の二府四県を核で殲滅 これによって関西弁

を話す者は殆ど死んだ

これを脅威に思った日本政府は、日本上空にあの防爆壁を張り、それに目をつけたアメリカは日本と同盟を結んだのだ。

日本は平和条約で他国に攻め込めない代わりにアメリカに攻撃を託し、アメリカは日本にアメリカ上空に防爆壁を張ってもらう。こういうわけだ。

テュワー、何かが引つかかっている……

そうか、雄二は国家ではなく、テュワーの者か。

軍事に対してテュワーは国家よりも権力がある。雄二の力は明らかに武力。

これで、もう一つ俺の中で引つかかっていたことも解決した。

なぜ人材の数が豊富な国家は、雄二の様な力をもった者を、わざわざ小さく極めて特別な物も無いこの町に送り込んだのか。この町に何か用があるとしても、雄二の様な特別な者を送りこむはずがない。雄二がどういった存在なのか分からない俺にでもそれくらいは理解できる。

そこが唯一引つかかっていた。しかし、人材があまり多くないテュワーならどうだ？

特殊な力を持ったものを送り込めば危険な任務だろうと死ぬ確率が下がるし、力を持っていない一般人より送り込む人数が少なくて済む。

テュワー関係者か。もっと早く気付くべきだったな

その時、ベルの音が鳴り、天井に設置されたスピーカーから機械の音が響いた。

<訪問者です。未登録の方で御座います>

雄二か？ このインターホン、一度来たことある人ならインターホン押した時の指紋で登録した人の名前言ってくれるから便利だけど、初めての訪問者の名前を言ってくれないのはちょっと不便だな。

俺は壁に組み込まれている機械に手を伸ばし、電源を入れる。す

ると画面に家の前の様子が映し出された。

インターホンの前に雄二と、見覚えのある女が居た。二人は楽しそうに喋っている。

俺はとりあえず、雄二のデータを機械に入力した。こうすれば、これから雄二が来たことが分かる。

小さめのバッグを肩にかけて、靴をはき、急いで外に出た。
「よっ」

雄二が俺に笑いかけながら、軽く片手を上げた。俺も愛想笑いを
して手を振った。

「おはよ」

俺は返事をしながら、指を扉の中心に当て、鍵を閉めた。

そして石造りの階段を駆け下りて、二人の元についた。

俺が雄二に話しかけ様とすると、先に雄二が隣の女子を指差しな
がら話す。

「こいつ同じクラスのフォ……綺羅、知ってるよな？」

ん？ 今言葉が詰まったような……

そういえば、雄二と同時期に転校してきた女子が居たな。

もしかしてこいつもテュワーと関係ありか？

綺羅は両手を中心でそろえて、軽くお辞儀をした。

それから顔を上げて、穏やかな表情で俺の顔を覗いてきた。

「浜野綺羅です。喋るのは初めてね、倉田君。私も一緒に行くこと
になったの、よろしく」

「あ、うん。よ、よろしくね」

俺は彼女から目をそむけて、思わず早口で言ってしまった。

女子の前ではどうも緊張して舌が回らなくなってしまふという、
忌むべき悪癖は改善しなくては。

それに気付いたのか、雄二がにやにやと笑ってきた。

「おいおい浩一、綺羅の前では恥ずかしいのか？ 綺羅、もてもて
だなあ」

それに綺羅は顔を赤らめて、くすつと笑った。

「私の美貌に悩殺されたのね、うふっ」

彼女は人差し指を俺に向けて、バーン、と言った。

これが世間一般で言う冗談という、やつ……なのか？

まあ馬鹿は無視だ。今この時点で雄二と綺羅の関係をある程度知っておかなければ。

綺羅は雄二と同時期に転校してきた。そして今、一緒に行動している。これだけで綺羅が雄二、テュワーと何か関わりがあることは否めない。それにもし二人が繋がっているのだとしたら、綺羅が雄二と同じ様な力を持っていると考えられる。だが、テュワーはそんなに人材が多いわけでもない。こんな小さな町に、特殊な力を持った者が二人。明らかに不自然だ。だとしたら綺羅の方は力を持っておらず、雄二の補佐的な役割をしている。そうとも考えられる。

ならば綺羅の存在は大きい。力を持っている雄二にテュワーや力のことに關して聞こうと思っても、雄二が力を持っている限りなかなか聞き出せないだろうし、そこまでバカとも思えない。

しかし綺羅ならどうだ。雄二より口は固そうだが、綺羅が力を持っているのだとしたら？ 脅してもいい。多少手荒なまねをしてもいい。拷問をするのならば、雄二より断然簡単に聞き出せる。力を持っていないから、反撃される心配が無い。

現時点では分からないからなんともいえないが、綺羅が力を持っていればかなり好都合だ。

今は雄二と綺羅の関係を聞き出すのが先だが、今訊くのは不自然か？ 駅のホームでトイレに行くから着いてきてくれ、なら疑われる心配は無い。初めての友達で俺が雄二と本当に仲良くなりたいと思っている、という演出にもなる。

よし、とりあえず今は駅へ向かおう。

「それよりも、早く駅行こうよ」

「そうね、こんなところでのろのろしてたら電車乗り遅れるかもしれないし」

「行くか」

二人はあっさり俺の提案を受け入れて歩き出した。俺も二人の跡を追って歩き出した。

今日はどうやら晴天の様だ。まあ、あの防爆壁がある限り曇りと同じ様なものだが。

ちよつと喋ってみるか。

「あのさ、今日のニューズ見た？ 防爆壁の厚さ変更」

それに二人は、あー、と叫んで俺を同時に指差してきた。

「見た見た、俺見た！」

「私も見たわ！」

いちいちうるさい奴らだな。俺はため息が出そうになったが、途中で止めた。

雄二が腕を組んで、少し真面目な表情になる。

「そもそも、もつと早く防爆壁を薄くすりゃよかったんだよ。十メートルもあつたら、地上が暗くなるのくらい分らないのかな？」

しかも日光を遮るだけで紫外線とかは降ってくるから、日焼けしなくなるとかは無いし、本当不便ばかりだよな」

ほうほう、紫外線は遮れないのか。肌が白い人があまり多くないのは、そういう訳か。バカなのに、よくしってたな。それとも、テユワー機密情報なのに口が滑ったとかか？ ちらつと綺羅の表情を覗いてみたが、挙動は感じられなかった。動揺が無いということは、機密情報ではないということだな。それとも演技か？

ってどうでもいいか。

「ERCCで調べる？」

俺がリュックから銀色に光るノートほどの大きさの機械を取り出すと、二人は大声を上げて食いかかってきた。

「倉田君、ERCC持ってるの！？」

「えっ、あつうん……」

「高かつたろ！？ 噂じゃ三十万はするって聞いたぜ？」

「いや、これは五十万したよ」

『はあっ！？』

二人がまた同時に大声を上げた。まあ、驚くのも無理無いな。

今世の中は戦争で、どんどん景気が悪くなっている。だから物の値段が安くなつて、五十万といつても昔の値段でいえば百万はするらしい。

しかし、E R C Cはそれくらい便利なもので

無線ラン内臓で、日本のどこにいてもインターネットにアクセス可能、画面は最先端の電子技術とやらで空中に浮かび上がっている。そのうえ、電子反応によってその浮かび上がっている画面をタッチするだけで操作が出来る。テレビや、テレビ電話機能もついてるし、設定さえすれば最新ニュースをいち早く届けてくれる。更に更に、防水耐熱加工、強化プラスチック外装……どんな状況にでも耐えられ、重さはたったの百グラム。俺の最高ともいえるお供だ。小学生のお供、「ランドセル」とはわけが違う。

彼らは羨ましそうにE R C Cを見てくる。ははは、そんなに見たつてあげないよ。

「じゃ、じゃあさっきのニュース調べてみるよ」

雄二が腕を組んでいった。もしかして、これが偽物とも思っているのか？ そんなの画面を起動すれば一発でわかることだろ。

俺が電源を入れると、途端にデスクトップ画面が起動した。それに二人は感嘆の声を上げた。

「や、やっぱり本物だったんだあ」

「本物見るのは初めてよ、私」

二人はまた羨ましそうにE R C Cを凝視する。えへへ……まあ、こういうのも気持ちがいいもんかな……

俺は歩きながら片手でキーボードに文字を入力していき、昨日のニュースを調べた。

「防爆壁厚さ変更に関して、アームズTVがこれに賛成か反対か、緊急世論調査をした結果が載ってるよ。賛成が69、反対が31。賛成に投票した人の主な要因は、日本を明るくして欲しいから、反対の方は危険だと思うからやめてほしい……俺は断然賛成だけだね」

二人は俺を挟み込む様に両脇から画面を覗きこんで、興味深げに頷いた。おい、おしくらまんじゅうみたいなのをするな。キモい
だろ。

二人はふむふむと頷きながら画面を覗いたままで、一向に離れる
気配を見せない。

流石にいらいらしてきた。この怒りが爆発する前に、二人を離さ
ないと……

俺はE R C Cの電源を突然切る。刹那、思ったとおりの展開にな
った。

鼓膜が破れんばかりの大きな悲鳴が双方から上がる。本当に単純
バカな奴らだ。行動パターンが見え見えだよ。

「見てる途中だったのに！」

「倉田君、ちよつとひどいわよ！」

はぁ、本当にため息が付きたい。ここまで息のあっている人間は
見たことがないよ……今日は雄二と綺羅詮索よりも、二人と普通に
話す方が大変になりそうだ。

三十分かけて、やっと駅についた。三宮行きの電車がくるまで、
あと六分ある。

駅はいつもよりひっそりとしていて、人はあまり多くなかった。

石造で二階建て、横には駅よりも少し大きめの会社があり、ほんの
少し高級感漂う駅。俺達はその中のあまり大きくないホームで切符
を買っていた。切符を買い終わると俺達は改札を通り、プラットホ
ームへ向かう。その途中、俺はズボンを抑えながらじたばたする演
技をした。実に健気な少年の如くな。

「ちよ、ちよつとトイレ。雄二も一緒に行かない？」

雄二、ここで断ればぶっ殺す。こんな恥ずかしい演技までするな
んで、初めてなんだから。

「お、いいぜ。綺羅は待つとけ」

期待通りの返事。内心安堵の息をつきながら、俺と雄二は急いでトイレへと向かった。

時間が惜しい。トイレに向かう途中でも、俺は構わず雄二に質問する。

「綺羅とどういう関係なんだ？」

あまり疑われない様に、俺は雄二をバカにする様に笑いながら言った。こうすれば大抵の中学生は、恋人か何かと思われていると想像する。

しかし雄二はなにか包み隠している様子でもなく、あっけからんとした表情で俺の顔を見てきた。

「彼女さ」

ぶっ……ここまでストレートに、恥じらいも見せずにこういうことを言われると流石に笑える。

でも、嘘なんだろう？ 分かってるさ。だから、こういう質問を続けていけば綺羅の秘密に繋がるものが見えてくるんだ。

しかし、聞ける質問は最高でももう二つか三つくらい。雄二は俺に力を見られたことくらいは気付いているはず。そんな相手が、自分やその同時期に引っ越してきた者の詮索をする、これは自分の力への詮索、並びに自分が持つコネクションへの詮索へと繋がることになる。

それくらい雄二でも分かるはずだ。雄二が分からなかったとしても、綺羅には分かるだろう。綺羅の方はそこまで馬鹿とも思えないいや、思いたくない。馬鹿コンビをテュワーが二人も送り込むなんて、あり得ないからだ。

更に言えば、綺羅という人物が居る時点で、俺は最低限出来る質問の数が更に減ってしまっているということになる。

綺羅が力を持っていないにせよ、雄二同様テュワー関係者なら彼よりも今後厄介な存在となる。だがもし、綺羅が力を持っていないのだとしたら、彼女は必要

いや待て。なぜ普通の女がテュワーという機関に入っている？

どう見ても綺羅は知能が高い方に見えないし、少し雄二に似たタイプでもある。

十四歳という若さでテュワーに入っているのもかなり珍しい。特殊な技術を持つている様にも見えないし、人材を厳選するテュワーに限ってこんなに普通の女を勧誘するとも思えない。

だとしたら。“綺羅は力を持っている”。それしか考えられないいや、テュワー関係者だという前提がそもそも間違っている可能性だって

……考えたって無駄だ。今は疑われない程度まで、最大限に秘密を引き出す。雄二が力を持っていること自体は確実なんだ。

俺達はトイレにかけこんだ。俺はさつさとよをたしたが、彼を横目でちらつと見るとなんとズボンを下まで下ろしているではないかこれに俺は一瞬思考回路が停止してしまいが、自分の使命をはたと思い出す。俺はけつ丸出しの雄二に声をかける。

「綺羅と付合ってるって、前住んでたところも同じってこと？」

雄二はズボンを引っ張り上げながら、俺の顔を見返してくる。そしてまた忌憚のない声で、あっさりと言い放つ。

「うん、前は東京に住んでただけだな。一緒にこしてきたんだ」
これが嘘でないとすると。東京からきたと言うことから、テュワー日本本部がある東京にいたと言うことになり、雄二がテュワー関係者ということは更に濃厚。同時に、綺羅と引っ越してきたということは、彼女もテュワー関係者である確立がますます高い。手を洗いながら、彼に最後の質問をする。

「なんで二人そろって引っ越してきたの？ 親が居るなら、恋人だからなんて理由で一緒にこしてこれるはずないじゃん」

その言葉にほんの少しだけ雄二の表情が歪んで、すぐに元に戻った。彼は俺から目をそらして、洗っている自分の手をじつと見つめる。

「親が居ないんだ、俺も綺羅も」

やっぱりな。でも、そんな悲しそうな声出したって同情しないよ

？ 俺とお前はうわべの友達であって、敵でしかないのだからな。
だが、この質問は秘密を引き出す為にしたわけじゃない。雄二の心
を掴むためだ。

俺はその言葉にはっとして、雄二の顔を啞然と見つめる。

「お前……も？」

雄二はゆっくりと頷いた。よし、今のところ演技は見破られていないな。

俺は手についた水を振り払って、少し間を置いてから壁に背中からもたれかかった。

「なんで言ってくれなかったんだよ」

俺がそう言うと、雄二ははっと顔を上げた。鏡越しに真剣な眼差しで見つめてくる。よし、ここで優しい一言をかければ。

「友達だろ？ それに俺、嬉しかったんだ。いままでどんなに求めても、誰も友達になってくれなかった」

本当は求めたことなんてないんだけど。

「でも、雄二は友達になってくれた……嬉しかった。だから、嘘なんて嫌なんだ」

俺嘘つきまくってるのに、ちょっと笑える。

「悩みでもなんでも聞くからさ。嘘なんてやめてくれよ……友達なんだから」

こういつとけば、テュワーのこと告白してくれたり？

口と心が全く一致していない。ああ、吐き気がする。なんでこんな馬鹿の為にいちいちこんな演技をしなければいけない。思うが、必要な事だ。我慢しなければ。

雄二の目にはうすく涙が浮かんでいた。テュワーにいたからずっと友達が居なかったくちか？ ならば更に有効的。雄二の心は驚きみだ。

それに嘘をつかないと言わせることで、告白の可能性も少しだけ出てくる。まあ、これはあまり期待しない方がいいが。

よし、最後の仕上げ。俺は雄二に微笑みながら、背中を軽く叩い

た。

「彼女に泣き顔見せちゃ駄目だろ？ さ、涙拭いて早く行こ」

雄二は俺に笑顔で振り向いて、浮かぶ涙を右手で拭った。彼は笑顔を保ったまま、頷いた。

成功。雄二から秘密を引き出すと共に、信頼を手に入れた。

これで今日から雄二にどんどん踏み込んでいける。

雄二とこれからも友達…… テュワーに入るまでは。

TOUA日米軍事決定有権機関 日本本部

東京にあるテュワー日本本部。外装のコンクリートはなめらかな白で塗られ、優美な雰囲気のを漂わせている。天へ伸びるビルは、周りに建っているどのビルよりも高く、広い。

その中にある、会議室。有に百人は入るであろう部屋の中に整然と、長いデスクが幾許か並べられている。前方のスクリーンにはTOUAの紋章が映し出されており、そしてスクリーン前に議長席が置かれている。

今、この会議室にある全ての席は人で埋まっていた。その者達が着込んでいるのはテュワー機関員の正装である、聖職者を思わせるダークスーツ。

ざわめく空気の中、最前列の男が勢いよく手を上げた。議長席に座る、五十代後半という感じの、目をぎらぎらさせた男が彼を指名した。

最前列の男は書類に目を向けながら立ち上って、意見を述べ始めた。

「皆さんもご存知のとおり、防爆壁はどんなに薄くしようが厚くしようが、防爆力に変化はありません。それに防爆壁を張っている“ソムニア”に命令さえすれば、今の防爆壁より強固かつ薄い防爆壁を張ることもできます。奴が命令を素直に受け入れればの話ですが

」

それにあちこちから怒声が巻き起こる。

「それができないから困っているのだろう！」

「それに、国民の不安はどうなる！」

「そうだ！ 防爆壁が予定より更に薄くなると分かれば、薄くなっても防爆力が下がらないということを知らない国民からは、反対の声がまきおこりますぞ！」

そこで、前方のスクリーンに映し出されていたTOUAの紋章が突然消え、“テラ”という文字が映し出された。

それに会議室の視線は一斉にスクリーンへと向けられる。

<皆さん、落ち着いてください>

頭上に設置されたスピーカーから、機械で変換された様な、低い声が会議室全体に響き渡った。それに全員が黙りこくる。またあの声が響く。

<今回の議題、防爆壁の厚さを予定より更に薄くし一メートル前後にするとの意見でしたね？ 皆さんのご意見を参考にして、私が後日結論を発表させていただきます。日時については、日本総官の方から指示が出されると思うので、それに従ってください>

スピーカーが切れる音がするとともに、前方のスクリーンもTOUAの紋章に戻った。呆然と座り尽くす機関員達を見て、議長が即座に声を張り上げた。

「それでは、本日の議会はこれにて終了とさせていただきます。アメリカ機関員の方は十二階司令室にお集まりください」

不服そうな表情をして、機関員達のほとんどが立ち去った。

ひっそりとした会議室には、もうまばらにしか人はいない。スクリーンも真っ白で何も映し出されていない。

残っている者達の中に、タバコをふかし、デスクに腰をかけて話している男が二人いた。

眼鏡をかけ、近寄りがたい雰囲気を出している男の方が、もう片

方の、どこかまだ幼い感じを残している男に問う。

「どうだ海下。初めてのテュワー総会議の感想は」

海下と呼ばれた男は、頭に手を当ててぺこぺこ頭を下げながらいう。

「影山さんの言ってた通り、なんだか自分は特別なんだ、と少し感じましたね」

それに影山はおもわず微笑して、そうだろう、という感じで頷き、眼鏡を押し上げてタバコの煙をはいた。

海下は更に、興奮した様子で続ける。

「それになんだか皆さん、とても凄かったです。問題に対してバシと討論しあって……影山さんは特に」

最後の言葉が付け足す様な感じで、それにまた影山は思わず笑ってしまう。

彼はタバコを灰皿に押しつけながら返事をする。

「海下もあれくらいに発言できる様になればいいな。それならば、テュワーの秘密もある程度教えられるのだが」

「え、秘密ってなんですか？」

海下は目を輝かせて、影山に迫る。だが彼はそんな海下を片手でうつとうしそくに払って、ため息をつく。

「発言できるようになってからと言っただろう？ そんなに慌てるな。いつか分かる時がくるさ」

「ふーん。じゃあ、あれは誰ですか？ あの、スクリーンから声だけが聞こえてきた“テラ”という人物は。これも秘密？」

それを聞いて、影山の表情が一瞬曇るが、すぐにいつもの穏やかな表情に戻ってタバコを一本、また引き出してライターで火をつける。

タバコを吸って、煙をふかぶかと吐きながら、彼は返事をする。

「テュワーの最高責任者は、日本総官の御堂孝三、アメリカ総官のJ・クリフト・ローランス。世間一般ではそういわれているが、本当は違う」

鈍い海下は、意味がわからず首をかしげる。それにまた彼はため息をついて、彼の顔を見つめなおす。

「テュワー、裏の最高責任者。全機関員に命令を下せ、アトミックに対しても絶対的に指令権を持つ唯一の人物。それが“テラ”だ」

第二章↳騙詐↳（後書き）

またお読みいただき、ありがとうございました。
今回はかなり世界観を広げました。

TOUA、綺羅、テラ……など。

一章一章に色々な展開を用意していますので、どうぞご期待ください^^

では、また会いましょう。さようなら。

第三章へ邂逅へ

テュワー二階臨時設置室

「それでは只今より、TOUA機関説明会を始めます」

部屋の一歩前においてある、大きな木造のデスクに手をついている男が言った。

男はテュワーの正装である、聖職者が着込んでいる様なダークスーツを身に纏い、その長身と眼鏡越しに見える冷たい瞳から近寄りがたい雰囲気放っている。

影山麟角。それが彼の名である。人材教育部部長という地位にある。

そして今、彼は前方に並んだ見慣れぬ面々を見回している。まだ十代半ばくらいの少年や四十代位の男性、影山同様冷たい目をもった女。

その面々は色々だった。海下もその一人だった。

色々な年齢の面々があるが、彼らには一つだけ共通点がある。テュワーに入っただけ、ということだ。

人材教育部部長である影山は、テュワーのことを説明するためにこの面々を集めた。まだテュワーに入っただけの彼らは、このことを全くといっていいほど知らない。

いや、世間一般的情報程度は下調べしているのだろうが、本当の姿は公に出されている情報とまったく違っている。

だからこうして影山はテュワーに新しく人が入るたびに説明会を開いているのだ。

「それでは、資料の三ページを開いてください」

彼らは資料を開く。三ページには挿絵もなく、つらつらと文字が並んでいるだけだった。

海下も資料を開いて文章をちらりと覗くが、見たことも無いような単語が幾つか並んでいることに気付いた。影山は平坦な声音で文

字を読み上げる。

「TOUAとは、The Organization Using Atomicの略で、“アトミックを使用する機関”という意味です。これがTOUA本当の略ですが、世間一般には、The Organization which has decisive power and the right to be Used to Japan-U.S. military Affairs、で“日米軍事に対しての決定権、使用権を所持している機関”とされています。アトミックというものが国家機密情報であり、外に漏れてはいけないということから、フェイクの意味が使われているのです。その証拠に、貴方達の中にアトミックという単語の意味を知っている方はいないはずです」

そこで冷たい目をした女が手を上げて、立ち上った。自信に満ちた、小さな笑みを浮かべていた。

「知っています。英語で、原子という意味です」

影山はそれにため息をついて、目を伏せる。そして呆れた様な、どこか憐れみを含んだ様な声を出言った。

「はいはいありがとう、高崎君。そんなのに即答できて、自分の評価が上がるとでも思ったのか？ 国家機密情報が単なる英単語なわけが無いだろう？ 少し黙っておけ」

高崎は不服そうに目を細めて、静かに椅子に座った。影山はデスクにもたれかかり、頬杖をついて神妙な面持ちで続ける。

「それではアトミックというものがどういうものか、説明しましょう」

「影山さん」

説明会も終わり、影山は一服しようと喫煙コーナーに向かっていた。その途中、後ろから気の抜けた様な声と、ばたばたという足音が聞こえた。

影山が振り向くと、そこには案の定手を振るって走ってくる海下がいた。

彼は息を切らせながら、影山の横に並んで歩みを緩めた。

「いつやあ、流石影山さん。今日の説明会は最高でしたよ」

彼はにこにこ笑ってくるが、影山は前方を見据えたまま、静かに言い放つ。

「何か用か？ お前の様な奴が上司に媚びを売りに来たわけでもないまい」

「あらら、読まれちゃってますね。まあ、大学のときの先輩に今更媚び売っても仕方ありませんし。アトミックに関して聞きたいことがあるんです」

「やはりな。何を聞きたい？」

海下も前方に視線を戻し、微笑を浮かべる。

「ヘヴンの事に関してです」

「ほほう、ヘヴンのことを聞きたがるとは珍しい。普通はソムニアの方に興味を持つと思うのだが……ヘヴンは今神戸にいる」

それに、海下が首をかしげる。

「何故神戸に？」

「三宮にいるといわれる不法入国者の発見と、優秀な人材を探すためにだ」

神戸三宮

「雄二……何故おまえがここに……？」

「浩一……俺はあの女よりも、お前が好きだ」

「えっ……」

「お前のその可愛い顔に惚れちゃった……」

「……俺もお前が好きだよ」

「何よあの映画！」

綺羅は頬を膨らませて、不満げな表情をする。

俺は呆れて声もでない状態だ。

二人に誘われて、見た映画。これが最悪最低で

雄二の顔をちらりと見ると、彼は上目遣いに、顔を赤らめて俺を見ていた。

お、おい、マジか？

さっきの映画は、偶然にも浩一という少年が主人公で、これまた偶然、雄二と言う少年と好きな女の子を争奪し合うという、どこにでもありそうな話だったのだが。

クライマックスで意外や意外のどんでんがえし。

雄二は実はゲイで、浩一、いや俺じゃないよ？　こ……浩一に告白して、そして浩一もOKしちゃって。いや、だから俺じゃないよ？

でも雄二はなんで俺のことマジで見てるんだろ。ホントにゲイ？

「お、おい雄二。なんでそんなにまじまじ俺の顔見てるんだよ」

綺羅がぱつと振り向き、雄二の赤らんだ顔を見つけ、絶叫した。

「雄二がゲイになっちゃった！」

おいおい、大胆に言うな。雄二はぼけつとしたまま、首をかしげて。

「いやあ改めてみると、浩一の顔って可愛いなあって」

かわいいだと？　かわいいだと？　お前一体何を言っている……
かっこいい、だろ！

かわいいなんて……どこがかわいいつていうんだ！

雄二の言葉に、少し驚く綺羅だが、ちらつとこちらに視線を向けてきて、はっと気付いた様な表情になる。

「ホントね」

え？　ぐ、ぐう。女に言われるなんて、ちょっと嬉し……いや、

やっぱりかっこいいと言え！

「お、俺のどこが可愛いわけ？」

綺羅は目を細めて、俺の顔をいろんな角度から眺め、微笑みなが

ら言う。

「そのちよつと自信なさげな垂れ目よ。そしてぶつくりほつぺよ。よく見てなさい、雄二」

「おう！」

頬が丸っこいだと？ 俺のどこが……あごをさすつてみると、確かにちよつとふつくらしている様な？

俺のその行動を見た途端、綺羅が大声を上げて俺を指差してきた。「そうやって頬が丸っこいって言われて、確認するところがまた可愛いのよ！」

え、あ、じゃあやめないと。俺がいそいで手をぱつと下ろすと、また綺羅が大声を上げる。

「そう指摘されて、恥ずかしくて止めるところがまた可愛いのよ！」はあ？ じゃあ、俺どうすればいいの？ は、恥ずかしい。ただ、顔が熱くなっていく。

顔隠すべきか、いや、そうしたらまた可愛いとかって、なに相手のペースに巻き込まれているんだ。これじゃあ詮索どころじゃない！

ば、バカにしゃがって。後で目に物見せてやる。

顔が赤らむのもおさまってきて突っ立っていると、綺羅は腕を組んでつまらなそうに俺を横目で見てくる。

「なによ。その後は倉田君が顔隠して、また私が可愛いって言って、倉田君が私達から背を向けたところで、背後からチューしてあげようと思ったのにい」

その言葉を聞いた途端、雄二が驚いた様子で振り向き、綺羅の顔を凝視する。

“俺と言う男がありながら何を言うんだ”、って言うんだよな？ な？

「き、綺羅……浩一は俺の男だ！ チューだって俺がするんだからな！」

そ、そうきたか……綺羅は大声を上げながら、雄二を指差す。

「じゃあ勝負よ！ 雄二、分かってるわよね！」

「おうよ！」

二人は地面にひざをついて、スタンディングスタートの構えをした。

「位置について」

綺羅が言うと、二人がぱつと顔を上げた。二人のきらきらとした眼光は、俺の頬へと向けられていた。

お、おい、もしかして。

「よーい……どん！」

二人は唇を突き出して、案の定俺に向かって走り出していた。

や、やばい。このままだったら俺のファーストキスがこんな奴らに。

されてたまるかぁ！

俺達は街中の視線を集めながら走り出した。

や、やっと逃げきった。この男子トイレの個室なら流石に追ってくるはずもない。それに、いろんな所に入ったり出たりして錯乱させたから、更に分かりにくくなっているはずだ。

つまらん喜劇につきあうのもここまでだ。ずっと三人でいたから時間がなかったが、今なら一人。堂々とERCCでデューワーを調べられる。

いや、一応電子スコープつけて、周りからは画面不可視にしておくか。

俺はERCCを早速起動させると、右目に小さな片眼鏡の様なものをつけた。これが電子スコープ。画面の光を周りから不可視にすると、この電子スコープでしか画面は見えない。

ネットに接続し、ERCC本体の下部をスライドさせてキーボードを取り出す。

「T / O / U / A……いや、一応正式名称入れるか。日米軍事決定

有権機関つと。お、早速公式ページ発見」

そこには、TOUAの名前の意味、主な仕事、機関の構成などが記載されていた。

たいした情報があるとも思えないし、ほとんどは嘘の情報だろう。雄二の力に関しては載っているはずがない。

だが、機関構成と仕事くらいは本当のことが少しは載ってるかもしれない。

調べる価値はある。

機関構成、と書かれたボタンをタッチし、そのリンクへととぶ。

調べてみたが、特別目立つものはなかった。

最高責任者、日米二人の総官、その下に次長二人、次長のかなり下のほうに各部の部長、各課の課長

そして日本には防衛陸軍、ハンターキラーなどの海上自衛隊。

アメリカには戦闘陸軍などが敷かれている。

戦争中なら当たり前の構成。

いや、これにもどうせ一部違う点はあるのだろうか。

最高責任者が違ったりするのだろうか？ いや、それは流石になるのか？

じゃあ次は仕事の方を

とその時、突然扉がノックされた。出る気なんてないよ、まだ調べる内容があるんだから。隣開いてないのかなあ。でも俺出る気ないし、漏らすがいい。ふふっ。

さ、続き続き。

「ママー、浩一のお兄ちゃんが出てこないから漏れちゃうよー」

「我慢なさい、浩一のお兄ちゃんの変態なんだから、この個室に入った途端貴方の身包みがはがされて、ママもはがされて……ああ、これ以上は……！」

こ、この声は！ っていうか何故男子トイレに、ママなる人が！？
急いで俺はERCCを終了させ、ゴーグルも外して二つをリュックの中になおした。

こ、これってトイレしていた様に見せた方がいいよな？

思ったが実行だ。俺は早速ズボンを下ろし、便座に腰掛けた。

「ママ、これは僕が侵される前に浩一のお兄ちゃんをやるしかない様だね」

「ええ、やってあげなさい」

や、やる？ どのやるだ。闘る？ 殺る？ 他にやるなんてあつたつけ。

ともかく、ヤバい。逃げないと。でもどこから？

逃げるつたつてズボン上げないと。いや、だから何処から逃げる？俺らしくないぞ、落ち着け。

そうしてるうちにも、扉の上に雄二のものらしき手がかかっていて、必死によじ登ろうとしている。

こうなったら……強行突破だ。

俺はズボンを上げ、リュックを肩にかけてゆつくりとドアへと近づいた。

そしてひどくゆつくり、錠を横に引いていく。そして小さな金属音と共に錠が外れた。途端、俺はドアを思いっきり開けて、もろとも雄二を壁へと叩きつける。彼は短いうめき声を上げると、すると地面へ倒れこんだ。

それに雄二を応援していたと思われる、綺羅の動きが一瞬止まった。

俺はそれを見逃さず、彼女のわきをすり抜けあつという間にトイレからとびだした。

外は人だらけの商店街。これならなんとか逃げきれ

「つかまえた」

後ろから、体が細い両腕につかまれ、視界が一瞬で変化する。

俺は再び、トイレの中へと舞い戻っていた。

そして一気に個室の中へと連れこまれる。その中には、艶笑を浮かべる雄二が待っていた。

「だ、誰かぁ！」

「ふっふっふ、倉田君のホッペは柔らかかったわあ」

「ふっふっふ、浩一の唇は甘酸っぱかったぜ」

「黙れ！」

こいつ等は、本当にラリってるな。

個室に連れこまれ、俺はキスを迫られた。が、何故か二人は途中で止めた。

結果としてはよかったが、やはり冗談だったということだったのだな。

とんだ冗談に付合わされてしまったものだ。

いつもならキレるところだが、我慢しなくては。

腕時計を見ると、時計はすでに一時を指していた。そういえば、腹が減ったな。

商店街の、人が行き交うと真ん中で俺は立ち止まった。

「そろそろご飯食べない？」

それに二人は目を光らせて、二人そろって頷いた。

『行きたい店がある！』

二人が同時に手を挙げて、同時に言った。本当に一心同体だな。

まあ、俺はたいしていききたい店があるわけでもないし、二人に従うか。

「何処？」

『スカイラット！』

「ああ、あの中華料理店か。あそこ美味しいよね」

スカイラットと言えばチャーハンが美味かったよな。餡かけそばも美味しいし、キムチラーメンも美味しいし、ツバメの巣も美味しいし

ああ、よだれが出てきた。

「それじゃあ綺羅、浩一、行こうぜえ」

雄二が前方を指差しながら、元気よく行進しはじめた。本当に子供なんだな。疲れるよ。

俺は行進する綺羅と雄二の後ろからゆっくりとついていきながら、久しぶりに来た商店街を見回した。

三ヶ月前はなかった大きな衣服店、アイスクリームの店。それくらいで、あまり変わったところは見られなかった。

おっと、こんなことに気を取られている暇はなかった。早くこの二人の詮索をしなきゃな。

でも、今日見た限りではどうもテュワー機関員として相応しくないくらい、子供じみた行動が多かつ

刹那、後ろから物凄い殺気が溢れ出した。心臓が射ぬかれた様に、俺は一瞬硬直した。

前方にいた二人が物凄い形相で後ろを振り向いてきた。俺もそれに反応するが如く硬直が解け、後ろを振り向いた。

しかし後ろは街を行き交う人達ばかりで、とくに変わった物はなかった。そして、振り向いた時には殺気は消えていた。

俺は首をかしげながら前方に向き直ると、俺の前に二人がいた。

俺が驚いて一步のけぞると、雄二がいつもとは全く違う、平坦な声音で俺につばやいた。

「スカイラットに行つてくれ」
えっ

気付いた時には、もう何処にも雄二と綺羅はいなかった。

ど、どうなってる。どうなってるんだ。

さっき放たれた殺気が関係してるのは間違い無い。でも、これだけじゃ駄目だ！

この状況ではあの二人についていき、殺気の正体を見極めることがベストだった。しかし、もうすでに二人は何処にもいない。

くそ、一杯食わされた。こうなったら、スカイラットで待っておくしかないじゃないか。

……まあいいだろう。二人がいない間に、じっくりとこれからの事を考えよう。

いまさら窮策を出しても無駄だ。

俺は少しずれたりユックをかけなおして、ふたたびスカイラットへと向かった。

三宮から少し離れたところにある、廃墟となった大きな工場。二年ほど前からはもう誰も近寄らなくなり、来月にも取り壊される予定である。

工場は中央に大きな空間があり、その周りを囲む様に壊れた機械やコンピューターが並んでいる。

誰もいないはずの工場に、三人の人間がいた。

一人は大きな機械の上に座りこんでいる、碧眼の少女。赤い線で模様が入ったダークスーツを身に纏っている。

それに対峙するは、中央にたたずむ雄二と綺羅。

「お前、アトミックだよな。その青い目見れば分かるぜ？ 何故俺達をつけたんだ、答える」

雄二が碧眼の少女を睨みつけたまま言う。それに少女は微笑んで返答する。

「まあまあ、まずは自己紹介しようよ。アトミック名でね？ 私はラスター。 “輝” って書いてラスター。お兄ちゃん達は？」

二人は一瞬戸惑った様に目を合わせたが、前方に向き直って雄二が言う。

「……俺はヘヴン。 “天” と書いてヘヴン。そっちはフォーチュン。 “占” と書いてフォーチュンだ」

ラスターはそれに、ふーんとあごをさすりながら二人を眺めた。その眼差しは、まるで全ての者を疑っている様なものだった。

「で、私に何か様？」

ラスターがそう訊くと、雄二はきつと睨み返す。

「こちらのセリフだ。それに見た限り、お前テュレイトの様だが？」

「テュレイト……ああ……そうよ、私反逆者」

ラスターが人差し指をくわえて、ぽかんと彼を見つめる。表情を

崩さず、彼は頷いた。

綺羅が一步前に出る。

「反逆分子は処分する。それがテュワールのルールよ。覚悟できてるんでしょね？」

それを聞いて、ラスターはため息をつきながら目を瞑って、立ちあがった。

二人が反射的に、体制を低くして構える。

「へー、お兄ちゃん達自信満々なんだ。でもごめんね」

彼女はかっと目を見開いた。

刹那、空気が揺れる。工場一帯に常人なら耐えられぬほどの殺気が溢れ出す。

その殺気は本当にどす黒いものだった。全てを殺してやる、全てを消してやる。

そういうものに溢れていた。

強大過ぎる殺気に一瞬潰されそうになる二人だが、なんとか持ちこたえた。

ラスターはにやりと笑みを浮かべる。

「私、だてにテュワー抜けてないから」

途端ラスターの姿が霞み、足元にあった機械が真ん中からぐにやりと捻じ曲がった。機械は左へと崩壊し、大きな音をたてて地面へと倒れた。

左に機械が倒れたということは、右に移動したということ。

二人はとっさに右を向くと、少し上にある二階の手すりに片手でつかまり、握り拳をつくった右手をこちらに向けているラスターがいた。

「お掃除始め」

ラスターは握り拳をぱっと開いた。途端、ラスターの周囲に小さく割れたガラスの様なものが大量に現れ、雄二達へと放たれた。

「任せろ！」

雄二が、握り拳を作った右手を前に突き出し、手をぱっと開いた。

そして雄二の背中辺りからぐにやぐにやした鉄が現れ、それが彼の前方で固まって鉄の壁を成形した。

綺羅は飛び込む様に雄二の背後へとまわった。

金属音が響いたかと思うと、周りの地面に大量のガラスが刺さっていた。

「左行け！」

雄二と綺羅は鉄の壁を放置し、左右に分かれて弾ける様にとびだした。

直後、背後で轟音が響く。雄二がちらと振り向くと、鉄の壁がラストーに蹴りで吹っ飛ばされていた。

ラストーは体がかがめて地面に着地し、ゆっくりと立ちあがって残念そうな表情をする。

「お兄ちゃん達も速いね。でも鉄の壁を現した事で前方にいる私の姿は見えなくて、キックは成功するはずだったんだけどなあ」

二人はその言葉を聞いて、舌打ちした。こいつは分かっていたのだ。

雄二が鉄を主に使うこと、防御の方法はあの鉄の壁だということ。を。

でなければ、ラストーがこんなにも速く蹴りを飛ばしてくるはずが無かった。

ラストーはつま先で地面をとんとんと叩いて靴のずれをなおす。

そして憎悪の光を含んだ瞳で、彼らを嘲笑する。

「でも死ぬのは、テュワーのお兄ちゃん達だよ」

第四章↳深読↳（前書き）

テュレイト
反逆者である輝に遭遇した雄二と綺羅。

彼女の後を追ひ、テュワーのアトミックとしてラスターを抹殺し
ようとする二人だが……？

第四章　深読

スカイラットについてからもう既に十分。

料理はまだ来ていないが、雄二達がえらく遅い。やっぱりあれは雄二の力と何か関係があるのだろうか？

雄二が急いで追いかけていったところを見ると、殺気を放った正体はテュワー関係者、もしくはテュワーの対立者ということになるが。

いや、可能性としては後者の方が高い。

前者。テュワー関係者なら仲間のはずだし、俺に疑われる様なタイミングで追いかけていかずとも、後でいくらでも会うことが出来るはず。それに、二人が振り向いた時のあの顔、ただ事ではない様子だった。

後者。テュワーの対立者なら、急いで追いかけていくのは当たり前、だよな。

それに、この際雄二達がテュワー関係者で無いという考え方は捨てた方がいい。

東京から引越してきた、綺羅という人物と動いている、謎の“武力的”力を持っている、という時点でほぼ決まった様なものなのだが。

いや、今はこんなことを考えているときじゃないんだ。

これからの雄二と綺羅への接し方、態度。そしていつ

俺が、雄二の力に関して気付いたかを伝えるか。

考えなければいけないことは山ほどある。

それに、雄二と綺羅が帰ってきたときの態度も一応考えておかねば。

二人は一体、何処へ行っただろうか。

ガラスの割れる音、地面を蹴る音。

廃墟となった工場の中を、三つの陰が跳びまわっていた。

一つは、赤い線で模様が入ったダークスーツを身に纏う幼い顔立ちをした少女、ラスター。

一つは、黒一色で統一された半袖のシャツと長ズボンを履いている少年、雄二。

そして、長い黒髪を後ろできちんと束ね、少しばかり鋭い目をした少女、綺羅。

ガラスの破片、鉄が地面に衝突する音が響き渡る。

とそこで、三つの陰がふと動きを止め、お互い息を上げることもなく、鋭く睨み合ったまま対峙する。

ラスターが不敵な笑みを浮かべ、腰に手を当てる。

「お兄ちゃん達、まあまあ強いね。それにそっちのお姉ちゃん、まだ力使ってないでしょ？」

綺羅は彼女に指差されると、威厳たつぷりに言い返す。

「あんた、だてにテュワー抜けてないとかいったけど……全然弱いわよ？」

それにラスターがふうとため息をついて、首を振る。

「挑発は効かないよ。テュワーで習ったよね？ それとも、“ブサイクな”お姉ちゃんには、そんなことも分からないのかな？」

それに、綺羅の表情が曇る。雄二はラスターを見据えたまま、口を開く。

「綺羅、分かってるな？」

それに綺羅は曇った表情のまま、ゆっくりと頷いた。

「挑発、でしょ。私への三大禁句、ブサイクを発動した限り絶対あいつをぶつ殺す。でも大丈夫、冷静よ」

しかし、雄二には分かっていた。綺羅が完全に冷静さを失っていることを。

綺羅はテュワーでいくら教えこまれていようと、少しでも侮辱されたらこうなる。

キレれば冷静さを失う。冷静さを失えば、瞬発的な判断能力が落ち、死を招く。

だからここは

「おいラスター、なぜお前は俺達に戦闘を持ちかけてきたんだ？」

「え？ 襲ってきたのはそっちでしょ？」

そこで雄二は目を伏せる。そう、話して時間稼ぎをする。おそろくラスターは綺羅が冷静さを失っていることを見抜けていない。

時間を稼げば、少しは冷静さを取り戻すはず。

雄二は横目で綺羅が動き出さないのを確認すると、そのまま話を続ける。

「いいや、お前は途中で隠していた気配を俺達の近くで一気に放ち、俺達にわざわざ気付かれる様なまねをした。理由がわからない。テュレイトであるお前はテュワーに見つかることを恐れ、アトミックである俺達と接触することだって普通は避けるはずだ。日本にいるアトミックの九パーセント以上は、テュワーが保有しているからな。それとも、俺達がテュワー機関員でないアトミックとも思ってたのか？ だとしたら間違いだ。俺達はテュレイトなどではない。俺達はテュワーの」

とそこでラスターはくすつと笑って、雄二の言葉を遮る。

「よく喋るね、お兄ちゃん。そんなに喋るから分かつちゃったよ……そっちのお姉ちゃん、私がブサイクって言ったから、怒ってるんでしょ？」

それに雄二は冷や汗を流して、身構えた。

彼はただ、ラスターを詮索する様なことを少し長めに言っただけ。ただそれだけ、ただそれだけなのに。バレた。

ラスターも体制を低くして、身構える。

「図星だね。時間稼ぎなんてさせないよ。大丈夫、すぐ楽にしてあげる」

テュワー日本本部十四階人材教育部

影山は自分の部長室にあるデスクで、E R C Cに情報を打ち込んでいた。

今回新しく入関した人物の学歴、技能など。

“海下楽斗”の情報を入力し終わったところで、彼は背伸びして小さくうめき声をあげた。

それから椅子に深く腰をかけ、疲れたため息をついた。椅子を回転させ、わずかに光が差し込む広い窓の方向へ向き、東京の町並みを見下ろす。

電球で装飾された家電量販店の大きな看板、大きな十字路を走っていく大量の車、店や地下鉄を行き来する人々吐き気がした。

「誰のおかげで平和な日々を暮らせていると思っている……」

テュワーがあるからこそ日本は平和なのだ。
なのに国民はこちらの苦労も知らずに、本当に身勝手なものだ。
普段は、テュワーがあるから、防爆壁があるから日本は安全だ、
と思っている。

しかしいざ問題が起これば、これはテュワーのせいだ、自分達は悪くない

だから彼は人が嫌いなのだ。

とそこで、扉がノックされる音がした。

影山はデスクに向き直り、入れ、と言った。

扉が開き、眼鏡をかけ鋭い目つきを持った女が入ってきた。

「高崎です」

高崎は片手に一枚の書類を持って入ってきた。

「ああ……三日前、説明会の時にアトミックは原子です、なんていった目立ちたがり屋か……その目立ちたがり屋がなんのようだ。媚びでも売りにきたのか？」

影山はデスクに膝をついて、嫌味たっぷりに言い放った。

彼女は表情を一瞬むつとさせるが、そのままデスクに近寄り、デスクに書類を叩きつけた。

そこには彼女の写真と、人材教育部配属という文字が並んでいた。「ほほう」

影山は彼女の顔を見上げてみる。挑戦的な瞳をしていた。

「私は司令部ですが、人材教育部に一時配属されましたので、お知らせを」

「そうか、ご苦労。これからよろしく。それじゃあ早速だが命令だ」それに高崎の瞳が一瞬光る。仕事がもらえる、という期待の光。しかし、影山は低い声で言い放つ。

「その書類を持って、すぐさまこの部屋から出て行け」

高崎はそれを聞いて硬直するが、すぐ不服そうな表情になると書類を荒々しげにつかんだ。

「失礼します」

怒りを抑えた声音で言い、高崎はそのまま扉へと向かう。

その背中へと、影山は更に言葉を放つ。

「最後に。私はお前が嫌いだし、お前の能力にも期待していない。そここのところ、踏まえておけ」

それに彼女は鋭い瞳で振り返ると、感情を抑え切れていない少し大きな声で影山に言い返す。

「絶対負けません。いつか貴方の……上司になってみせます」

言い残すと、彼女は扉を閉めて出て行った。

「……演技は疲れる」

影山はそう言うのと、椅子に再び深く腰を掛けた。

ああいうタイプは相手のことを憎めば憎むほど、それを越そうと必死になるものだ。嫌われ役になるのはあまり望ましくないが、人材教育部部長としての責務はちゃんと果たさねば。

高崎将子の教育、彼がこなす仕事の一つだった。

海下楽斗の教育もその一つ。

とそこで、ノックもなしに扉が開き、子供っぽい声が響いた。

噂をすればなんとやらだ。

「影山さぁん」

半泣きの海下がいた。彼はとぼとぼとデスクに向かってくる。

「ど、どうした」

「それがですね、僕ハッキング部なんですけど、今日入ったばかりなのにいきなり部長さんに怒られちゃったんですよ。なんでお前はそうドジなんだ、書類整理くらいいっかかりしろー、ってね。それから休憩時間になるまで、ずっと叱られてたんですよ、一時間も！」

それに影山は苦笑した。

「そりゃ部長もちよつと悪いな。一時間も部下を叱る暇があつたら仕事をして欲しいものだ」

「もう、あのおっさん困りもんですよ。ハッキングじゃなくて、ERCC整備とかを勉強すればよかったあ」

「時すでに遅いだ。ところで、何用だ？」

海下はその言葉を聞き、腕を組んで口を膨らませた。

「ぶんつ、影山さんは、物忘れが激しくて困りもんですよ。今日、十一月七日昼食休憩の時に、アトミックの訓練風景を見せてくれるって言ったじゃないですか」

影山はふと思いついた様に、あうつ、とうめいた。

海下はため息をついて、半眼で影山を覗く。

「図星なんですか。本当に物忘れ激しいんですねえ。思い出したんなら、休憩時間もあまり長くないですし、早く行きましようよ」

「あ、ああ分かった。準備しよう……」

影山はごまかす様に言葉を濁らすと、立ち上ってERCCの電源を切った。

地下一二階

二人がエレベーターを降りると、そこは白一色で統一された光溢れる通路だった。

地下十二階とは思えないほどの、明るい通路は一本道で、十メートルほど先に扉があった。

海下が、歩き出す影山の、スーツを引つ張って止めた。影山は目を細くして振り返ると、なんだ、と言った。

海下は扉を指差しながら、おどおどして答える。

「なあんか、物凄い殺気が溢れてるんですけど」

「おいおい、アトミックの気配はアトミックにしか読み取れないんだぞ。お前、アトミックなのか？」

影山は珍しくバカにした様に笑むと、前方に向き直って歩き出す。海下は影山の一言で一瞬立ち止まるが、顔をしかめてすぐに歩き出す。

「もう、影山さん冗談が過ぎますよ」

「ははは、すまんすまん。まあ、人間でも勘が鋭い者や、第六感が優れている者なら、少しくらいは読み取れるらしいからな。お前はそれだろう」

「ふ、ふーん……」

海下は腕を組んでまだ少し怒ったまねをするが、少し嬉しそうな表情をしていた。

それを見て、影山も少しだけ微笑み、少しだけ、昔の海下のことを思い出した。

大学時代の時から全く変わっていない。頭は良くせに、妙に子供っぽくて、世話を焼いてやりたくなる奴。もう少し大人になればいいのに、という気持ちと、もう少しこのままで馴れ合っていたい、という気持ちとが混在してしまう様な奴だ。

ふと顔を上げると、すぐ目の前に扉が待ち構えていた。影山は寸前で立ち止まった。

扉はよく見ると、厚そうな鉄製の扉で、中央辺りに『CLOSE』と、小さな電子掲示板に記されている。扉の上には、小さな黒い監視カメラがついている。

突然頭上から、機械を通した女の声が響いた。

< 関員手帳を提示し、目的、行き先を指定ください >

影山は懷から、テュワーの紋章が刻まれた関員手帳を取り出した。海下も慌てて取り出し、カメラに向かって関員手帳をつきだした。

< 関員手帳確認完了です >

影山は関員手帳を懷になおしながら答える。

「目的、戦闘訓練の視察、行き先、第五視察室」

< 目的、行き先、了解しました。第七視察室への道筋は、地面の発光線にしたがっておすすみください >

甲高い機械音が響いたかと思うと、『CLOSE』と記されていた電子掲示板の文字が、『OPEN』に変わった。分厚い扉は独りで動き、奥へ進む道を開いた。

途端、海下が感嘆の声を上げて、開いた扉に駆寄る。

「うわっ、かつこいい！　なんだか本格的にTOUAって感じになつてきましたね！」

「なんだそりゃ……」

影山はげんなりして首を振る。

海下はいまだ興奮した様子だが、影山はそんな彼の横を通りすぎて扉の中へ入っていく。

それに気付いたのか、海下は再び慌てて彼の後を追って歩き出した。

「あ……これが発光線ですね」

扉の中の通路は、外の通路と違って薄暗く、海下が地面に発見した発光線以外、光源は無かった。

道筋は十数本に分かれているが、一本の道の発光線だけが光っている。

この道が正解と言うわけだ。

彼らは発光線に従って、その道を進んでいく。

しばらく歩くと、また扉が前方に出現し、機械を通した女の声が響く。

< 関員手帳を提示してください >

影山は懷からすぐさま取り出し、扉の上についていたカメラに向ける。

「またですか……」

海下も、愚痴をこぼしながらも関員手帳を取りだし、カメラに向けた。

<確認完了です。そのままお進みください>

扉が先ほどと同じ様に自動で開き、中から光が溢れた。

中に入ると、左手に大きなガラスウィンドウ、右手にふかふかのベンチが幾許か並べられているだけの、質素な部屋だった。壁紙も無柄である。もっと右を見れば缶ジュースの自動販売機と灰皿が置いてあった。

海下は部屋に駆け込んで、すぐさまガラスウィンドウに顔を押し当てて中の様子を覗きこむ。

影山も中に入り、落ち着いた様子で右手のベンチへと腰掛け、足を組んだ。

「か、影山さん、これって……」

ガラスウィンドウにかじりついたまま、海下は息を呑む。

影山はタバコを取りだし、それにライターで火をつけながら顔を上げる。

「第五視察室は、一番見晴らしがいいからな。ここからなら、この第三実戦闘訓練スペース全体を見渡せる。どうだ？ アトミックの戦闘は」

「……なんで殺し合っているんですか？」

海下が見た光景は、訓練スペースいっばいに広がる密林の中を跳躍するアトミック達だった。

そのアトミックの数、密林の高い木から飛び出しているものだけでも五十は居た。

そうになると、木の下で姿が見えない者も含めると二百はゆづに越えるだろう。

なぜ、全部で七つもある訓練スペースの内のたった一つに、これ

ほどのアトミツクが……？ 海下はそういう疑問を抱いていた。それに、やつらは殺しあつて いや、腹が切られて血は出ているが、死んではいない様だ。

影山は白い煙を吐きながら答える。

「正確に言えば致命傷を与えているだけで、殺してはいない。海下、陸軍編成の数え方は分かるか？」

話題が唐突に変わった印象を受けたが、海下は正直に頷いた。

「はい。小さい方から、小隊、中隊、大隊、連隊、旅団、師団です。あつ……てことは、今戦つてるのは、旅団対旅団つてこと？」

「そういうことだ。分かりが早いな。師団ではあまりにも数が多すぎるので、旅団で実戦訓練を行っているということだ」

少し沈黙が流れ、影山が煙を吐く息遣いだけが視察室にこだました。

しばらくすると、海下もガラスウィンドウから離れ、影山が座っている席の横に、神妙な面持ちでついた。

「どうした、そんな顔して」

影山がふと彼の顔を覗きこんで、そう聞いた。

海下はなにかためらいながらも、重い口を開く。

「もしかして、ですが。負けた方の旅団は」

その言葉を聞いて、影山は少し目を細めて彼の顔をじっと眺めた後、前方に向き直つて、疲れた様に煙と共にため息をこぼした。

「必要無しとみなされ、処分される」

海下は悲しげな表情で、悲しき死の舞台を見下ろした。

影山は表情を崩すことなく、ライターの蓋を閉じたり開いたりしていた。

再び沈黙が、流れた。

「やっぱりお姉ちゃん、怒ってたんだね」

ラスターは前方に並ぶ、傷だらけの雄二達の姿を見て、にやりと

笑いを浮かべた。

案の定、綺羅はキレていて、全くお話にならなかった。

雄二が攻撃を防がなければ、完全に二人は終わっていただろう。

雄二は口から流れる血を、袖で大雑把にふき取って、ラスターを睨みつけた。

「お前マジで、だてにテュワー抜けてない様だな……」

雄二の言葉に、ラスターはふっふんと胸を張る。

「でしょでしょ？ 私、お兄ちゃん達よりずっと強いんだからあ」

だが雄二はその言葉を、鼻で笑った。それを見ると、ラスターは目を細めて、何よ、と言いつつ放った。

「俺達よりお前が強いだって？ お前、ピント外れだな」

「はあ？ そんな傷だらけで、何言ってるのよ」

「二対一でこんなにもお前が俺達を圧倒しているのは、何故だと思っ？」

ラスターはあごに指を当てて、えーと、と悩み始める。

待ちきれない様に、雄二が口を開く。

「テュレイト相手に俺達の本当の実力を見せるのは、危険だと判断したからだ。だが……お前の力量はもう見極めた。お前が十人いても、俺一人に勝てない」

そういうと、雄二は別段身構える様子も無く、すたすたとラスターへと歩み寄り始めた。

その、あまりの余裕ぶりにラスターは流石に感情を抑えきれなかった。

「バカにして……私のほうが強いんだから！」

ラスターは、歩み寄ってくる雄二へ向かって飛び出す。彼女の動きは無駄が多すぎた。

怒りで、本当の実力が出しきれていない。

だが

「本当の実力を出したとしても、勝てるんだけどな」

突っ込んでくるラスターに向かって、雄二は立ち止まり、握り拳

を作った右手を向けた。

ぱつと拳を開いた瞬間、雄二の体の周りに長さが一メートルほどある針状の鉄が五本現れ、ラスターに物凄いスピードで向かう。

舌打ちをして、彼女は自分の心臓を的確に狙ってきた一本目を、右に跳んでかわす。

だが、跳んだ先には二本の針が、タイミングを見計らった様に跳んできていた。

ラスターはすかさず、上空に跳躍した。左の方に目を向けると、そちらでも二本、針が空をきっていた。どちらに跳んでも、針で攻撃できる算段。

彼女は内心ほつとしながら、雄二に視線を戻す。すると、彼は既に攻撃の態勢に入っていた。

「や、やばっ」

ラスターは急いで地面に拳を向ける。

「遅い」

雄二は指をきっちりそろえて開いた両手の平をぱんつと合わせた。刹那、空中で移動が出来ないラスターの両脇から、鉄の刃の様が二つ現れ、彼女へと迫る。そして、彼女の胴体をぴたつと挟みこんだ。

「あつ……」

ラスターは声にならない悲鳴を上げて、胴体から真つ二つに分かれて地面に落下する。まるで、紙がはさみで切られるかの様だった。二つの胴体が地に触れた途端、散乱していたガラスの破片が彼女の鮮血と共に、派手な音を立てて飛び散った。

彼はそれに近寄っていき、そして哀れんだ瞳で見下ろす。

「相手が悪すぎたな」

雄二は最後に、亡骸に鉄の柱を放って粉々に吹き飛ばした。

もう二十分……

注文したチャーハン大盛り三つ、雄二と綺羅の分まで食べちゃった。怒られないかな……まあいいか。

それより、あまりにも遅い。本当にやられてしまったのか？

それとも、あれはテュワーの仲間で、重要なことを伝えられているとか？

いや、それならあの別れ方は不自然過ぎる。

背後から突然膨れ上がった殺気、あの二人の顔、そしてこれだけ長い間戻ってこないこと

敵に遭遇し、戦闘になっていると簡単に推測がつく。遭遇というより、あいつらが追っていったただけだ。

だが、そうなるとますます雄二に着いていきたかった。

雄二の力、それがどの様なものか見極めることが出来たかもしれないからだ。

戦闘になれば、雄二はあの力を使うだろうし、もしかしたら敵も使ってくれるかもしれない。

だとすれば、いくつか候補が挙がっている、あの力の正体もほとんどん限定していくことが出来る。

今考えている中で一番有力なのは

“原子を創造する力”

魔法なんてものがあるとは考えられないし、原子なら何も無いところから突然生まれたりすることもある。宇宙空間では、常に起こっていることだ。

それに、創造できるのが鉄限定なら、そこまで軍事的に使えると言っわけではなく、テュワーに飼われていると言っのも納得できない。

しかし、原子創造の力ならどうだ？

物質とは原子の組み合わせによって構成されている。

それなら、原子自体を創りだし、組み合わせればどんな物質も無から創造することが出来る。

どう考えても、軍事的力だ。金を生み出して大金持ちになろうと

考えるものもいるだろうが。

もはや、防爆壁も原子創造の力なのでは……そんな考えがふと頭に浮かんだ。

「やあやあ、食いしん坊の浩一君」

突然の呼びかけに、俺はばつと顔を上げた。

そこには、傷だらけの雄二と綺羅がいた。

やはり戦闘だったのか。でも、ここは二人を心配する倉田浩一だ。

「ど、どうしたのその傷？」

俺はおろおろした様子でうろたえながら聞いた。さあ、どう返事をする？

綺羅はどさつと椅子にもたれ掛かり、店員を呼びとめて水を持ってくる様にいった。何故か、怒っている様にも見える。

雄二も小さく微笑んだまま、座って俺に返事をしてきた。

「まああれだよ、トイレに突然二人同時に行きたくなって、近くの店の中にあつたトイレには入れたのはよかったんだけど、俺が大の方しててさ、二十分も綺羅を待たせちゃって、大喧嘩して二人ともぼろぼろってわけさ」

ははあ、トイレに突然行きたくなって、と言うのがいきなりいなくなった訳にするつもりか。トイレに行くのに、あの形相か。笑っちゃうね。

大喧嘩したというので、綺羅が怒っている様に見えたとしても不自然じゃないと思わせるつもりだな。

雄二にしちゃ……まあ上手い。少々矛盾はあるがな。これが嘘だと言うことは分かるが、一応俺はふーん、と相づちを打っておいた。「ああ、くらくらする、ああ、くらくらする」

何故か雄二が突然そんなことを平坦な声音で言い、頭を抑えながら立ちあがってふらふら歩いた。何をする気だ？

と思っていたら、突然横に座ってきて、俺の膝に頭を乗せて寝転がった。

「浩一の肉マクラー」

「肉って言うな……！」

雄二は、振り払おうとする俺のズボンを両手でつかんで、ごろにやーん、と鳴いていた。

それを見た綺羅は、血相を変えてこれまた突然、机の下にもぐりこんで俺の股の間から顔を出した。

「ええと……倉田君の肉」

「いや……どう反応すればいいのか……」

とにかく離れろ、って感じで俺は下半身を振りまくって二人を離そうとするが、二人は、ごろにやーん、とか言ったり、ニクニク、とか言ったりして離れる様子は無かった。

うーん、何がしたいんだこの二人は。これじゃあ、下半身振るってる俺まで変態に見られるじゃないか。

とそこで、綺羅の動きが不意に止まった。俺はちよいと見下ろしてみると、綺羅は俺の服の中に頭を突っ込んでいた。

「お、おいっ！」

何故か、服の中から感心した様な声が響いてくる。

「素晴らしいお腹ね。ふつくらしているわ。これなら、お尻もかいでしようね」

お、お前何を

「え、俺にも見せてよ！」

「いいわよ」

俺の腹は見せもんじゃねえ、という心の叫びもむなしく、雄二は俺の服の中に頭を突っ込んできた。

「うおおおっ！　こりゃ運動不足だなあ」

……正直なコメントをありがとう。

「というわけで、ぺろぺろぺろ」

効果音着きで、突然雄二は俺の腹を舐め出した。おい、これじゃあマジで単なるエロマンガみたいだからやめてくれ。

俺は雄二に、服越しに一発げんこつを入れる。

彼は頭を抑えながら、服から顔を出した。

「上半身が嫌なのか？　じゃあ、下半身を」

「上半身の方がマシじゃ！」

「あ、じゃあまたお腹を」

なんてことを、あつさりと言い放つ。

も、もう付き合いきれない。周りは見てみぬふりして、完全に変態扱い。ああ、死にたいよ……

「とまあ冗談はこれくらいにして」

雄二と綺羅は、何事も無かったかの様に、元の席に着いた。ぶ、ぶつ殺すぞ？

「で、なんでチャーハンの皿が三つあるのに、それは全て空っぱなんだ？」

雄二が聞いてきた。ん？　雄二はバカか？

「え、そりゃ見れば分かるじゃん。俺が食ったの」

遅いお前等が悪いんだもん。目の前に餌があれば、犬はいくらでも食べるだろ？

だが俺の言葉を聞いた雄二は、腕を組んでじーっと俺の顔を見つめてきた。

ま、またゲイ現象発生か？

「やつぱり、大食いだからデブなんだな」

「いや、デブじゃないし」

うん、俺はデブじゃないよ。顔だって、こんなにクールな顔なんだからな。

雄二の横から綺羅も叫ぶ。

「そつよ、倉田君はポツチャリ系よ！」

「だから、ポツチャリでもないし」

俺はポツチャリじゃないぞ。外見はこんなにもスマートなんだからな。

雄二は少し考えてから、横目で綺羅を覗く。

「おい綺羅。浩一ってば外見が痩せてるからって、自分がスマート

だと思ってるぜ」

「うお、凄い読心術。まあ、事実そうなんだからな。」

よく言われる。顔は普通なのに体とギャップあるんだね、って。これは、体は太っているという事か？

綺羅も俺の顔をじーっと眺めてくる。

「外見は痩せてるかもしれないけど、もう私達は倉田君のお腹を見ちゃったからね」

「黙れ」

いつ終わるか分からぬ喜劇が続く中、俺の苛々は募っていくばかりだった。

影山と海下は第五訓練所を抜けると、急ぎ足で食堂へと向かう。

向かう途中、エレベーターの中で海下はふと口を開いた。

「あのー、アトミックは“原子を具現化する力”を持っているんですよね？」

影山は腕を組んで、頷いた。

「じゃあ……何故アトミックは人よりも優れた力を持ちながら、テクノロジーに従っているんです？」

彼の言葉を聞いた途端影山は、はっとなって目を見開いた。そして、海下の顔を睨みつける。

その反応を見て、海下は続ける。

「だってそうでしょ？ 原子を具現化する力を持っていれば、どんな兵器を人間が使おうと、金とかダイヤモンドとか、そういう超固いものを具現化して、防御すればいい話なんですから。ましてや、人間がナイフや拳銃で応戦するのは自殺行為もいいところ。人海戦術をしようにも、アトミックの絶対数があまりにも多」

そこで、影山は海下の口を軽く抑え、言葉を止めさせた。

「教えることは出来ないし、そう疑問に思ったことも、誰にも伝えるな。お前に災難が降りかかるだけだからな」

彼の威厳に満ちた口調に海下は気圧され、少し沈黙した後素直に頷いた。

それから、影山は海下の口から手を離しながら、小さく失笑した。「まさか、まだ入関してから二週間も経たない奴にここまで分析してやられるとは、正直驚きだ。大学時代の時から変わらないな、その分析力」

その言葉を聞くと、自慢気に海下は胸を張り、えっへんと言った。「ま、アトミックの力とその存在意義、テュワーという機関の本部軍事力などを緻密に推理していけば、簡単に辿り着けるんですよ、ふふふっ」

自慢する海下の姿を見て、影山はまた、苦笑して煙草をくわえた。

第四章↳深読↳（後書き）

お読みいただきありがとうございましたー^^

今回はかなりのシリアスタッチで試してみました。

今章で判明しました、アトミックの力。いかがでしたでしょうか？ 原子を創造する力。

雄二は「鉄」ですから、ラスターの「ガラス」に比べれば強いですが、「金」を具現化できるアトミックと比べれば弱いという事になります。まあ物は使いようですが。

それでは……感想お待ちしております^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3825a/>

力なき破壊

2010年10月9日01時10分発行